

# 現職英語教員の学生時代の辞書使用に関する一考察

寺 嶋 健 史

## 1. はじめに

辞書は言語学習及び言語教育には欠かせない。しかし近年、辞書を使わない学習者が増加する傾向にある。ベネッセ教育研究所が1990年、1995年、2001年の三度にわたって、全国の中学生と高校生を対象に学習基本調査を実施している。中学生を対象にしたベネッセ（2002 a）によると、「学習方法」に関する項目の中の「言語学習の手段として辞書を引く」の割合は、1990年の第1回調査では55.3%であったのに対し、2001年の調査では33.6%に減少している。そして、高校生を対象にしたベネッセ（2002 b）では、1990年の75.8%から2001年の62.6%にまで減少している。どちらの場合も他の項目に比べてパーセンテージの落ち込みが際立っている。この他にも、日本人英語学習者の辞書使用について調査した事例がいくつかある。高等専門学校の学生を対象に中学校時代の英和辞書使用について調査した勝呂（1988）によると、36%の学生は中学校でほとんど辞書を使ったことがない。2つの大学の学生に高校時代の英和辞書の使用頻度を調査した山岸（1998）では、60～70%が比較的頻繁に使用したと回答している一方で、畠山（1996）と藤村（2001）の調査では、大学生の大半は授業での辞書使用の習慣が形成されていないとしている。萩野（1995）、浅羽（1997）、畠山（2001）は大学生にかつて辞書指導を受けた経験を尋ねている。畠山（2001）では受けたことがある学生は53%であったが、他の2つの調査では3分の1程度であった。以上の研究結果から、中学生・高校生の英語学習で、辞書はあまり活用されていない実態が窺える。

英語教員を対象にした辞書に関する研究調査でも同様の傾向が見受けられる。山岸（1998）によると、中学校英語教員の64%、高校英語教員の60%は辞書指導を行うと回答しているが、その実施頻度は3年間に2～3時間程度というケースが最も多い。井上・多良（2004）は高知県の中学校と高等学校の英語教員229名を対象に英和辞書に関する大規模な調査を実施している。授業での辞書活用率は概ね4割程度であり、大半の教員は辞書指導の必要性を感じているものの、体系的な一斉辞書指導は殆ど実施しておらず、その最大の理由は時間が無いためとしている。しかし、辞書指導を実施すれば自学自習の習慣づけが期待できると結論づけている。寺嶋（2007）は、愛媛県の英語教員に対して実施した辞書に関する調査の中の、授業での辞書使用の実態について報告している。授業で辞書を扱う教員は6割弱いたが、その多くは高校教員であり、しかも若手よりも熟練教員が多い。

以上の各研究調査結果から、現在の学校英語教育現場ではあまり辞書指導が行われておらず、生徒が辞書について学ぶ機会が少ない実態がわかってきた。では現職英語教員は学生時代に辞書指導を受けたのであろうか。また、どの程度辞書を使っていたのであろうか。過去の辞書に関する経験が現在の自分の指導法に何か影響しているのであろうか。本論では、先述の愛媛県内の英語教員を対象に実施された辞書に関する大規模なアンケート調査結果に基づいて、英語教員の学生時代の辞書使用の実態を明らかにする。

## 2. 調査概要

### 2.1. 目的

現職英語教員の学生時代の辞書指導を受けた経験および自主的辞書使用の状況を調査する。そしてその結果と現在の授業における辞書の扱いとの関連性についての以下の予測を検証し、今後の英語教育における辞書指導について考察を試みる。

予測：学生時代に辞書指導を受け、授業外で自主的に辞書を頻繁に使用した現職英語教員は、そうでない教員よりも、自身が受けた指導経験に基づいて、辞書を扱う授業を現在実施している。

## 2.2. 被験者

愛媛県内の公立および私立の中学校，高等学校，中高一貫校などに勤務する現職英語教員 484 名。

## 2.3. 実施方法

まず，愛媛県内の学校に勤務する全ての英語教員に協力を求めるため，愛媛県教育研究推進委員会にて本調査の趣旨を説明し，調査協力の了解を得た。その後，県内各校に勤務する英語教員数を調べ，各校の英語科主任または校長宛に人数分の質問調査紙を郵送した。約 1 ヶ月の回答期間の後に，同封した返信用封筒で返送してもらった。アンケートを郵送した 958 名の英語教員のうち，484 名から回答が得られた（回収率 50.5%）。

## 2.4. 質問紙

本調査で使用したアンケートの質問事項は，(1)辞書に関する全般的なこと，(2)現在の授業における辞書の扱い，(3)自身の学生時代の辞書使用，(4)電子辞書について，の大きく 4 つのセクションで構成されている。本論では(3)の質問事項のうち，1. 学生時代に辞書指導を受けたことがあるか，2. 具体的にどのように辞書を使ったか，3. 授業とは別に個人的にどの種類の辞書をどの程度使ったか，の 3 項目の回答を集計・分析の対象とする。また各項目は，被験者の中学生時代，高校生時代，大学生時代，学外の 4 点について回答するように構成されている。なお学外とは，塾，予備校，家庭教師など課外での英語学習を指す。

## 2.5. 分析

各質問事項における選択肢の回答度数分布と有効回答数に対する割合（％）を集計する。まず全体的な傾向を、次に被験者の各校種学生時代別分析の傾向を調べる。さらに、2.4.節で触れた本調査紙のセクション（2）「現在の辞書の扱いに関する質問」の結果の一部とクロス集計をし、学生時代の辞書指導および辞書使用経験と、教員となった現在の授業における辞書の扱いとの関係について分析を試みる。また可能な場合には、カイ二乗検定を用いて各集計結果における特徴的な回答傾向の有無を検証する。

## 3. 結果

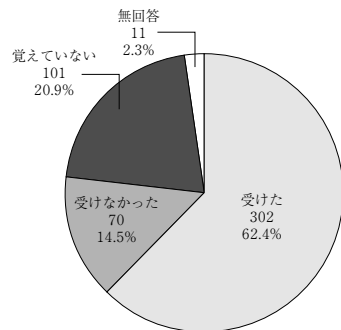
各質問項目の全体集計の際には無回答者を含む全被験者を対象にしたが、その他の集計においては特にその断りがない限り、無回答等の欠損値を除いた有効回答総数を対象とした。なおこれから先は、各種分析の集計結果全てではなく、統計的有意差が認められた結果、および統計的に有意ではなくても特に顕著な傾向が認められた結果のみを取りあげて詳しく紹介する。

### 3.1. 「学生時代に辞書指導を受けたことがありますか」(各校種で複数回答可)

#### 3.1.1 全体集計結果

全被験者 484 名中、学生時代に辞書指導を受けた教員は 302 名（62.4％）であるのに対し、70 名（14.5％）は受けたことがないと回答した（図 1）。受けた 302 名には、中学時代に一度だけ受けたという回答から、大学までかなりの頻度で受け続けたという回答まで全てが含まれる。受けたかどうか覚えていない 101 名（約 21％）は、

図 1 学生時代の辞書指導（N=484）



本来は受けたか受けていないかのいずれかであるはずのため、実際には受けた教員の割合は7割、受けなかった割合は2～3割近くにまでそれぞれ上昇することも考えられ得る。

### 3.1.2 各種校学生時代別集計結果

次に、具体的にいつ辞書指導を受けたかを示す各種校時代別の集計結果を図1aに示す。それによると、高校生の際に受けた割合が最も高い(44.6%)。さらに母集団を、辞書指導を受けたことがある教員302名のみ絞って換算すると、その割合は71.5%に相当する(図1b)。つまり、かつて辞書指導を受けたことがある全教員の7割は、必ず高校時代に受けたことがあるということになる。また、約半数の51.3%は中学生の際に指導を受けていることから、中学校で習得した知識や技能を基に大学受験の勉強をも踏まえた辞書指導が高校で実施されたのではないかと考えられる。しかし大学生になるとその割合は急に減少する。高校までに基本的な使い方は既に習得済みであろうということから、大学での指導は行われなかったのかもしれない。

図1a 辞書指導経験(各種校時代別)

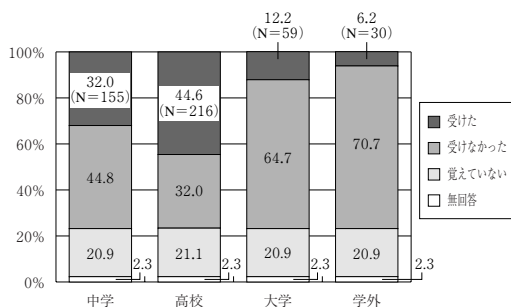
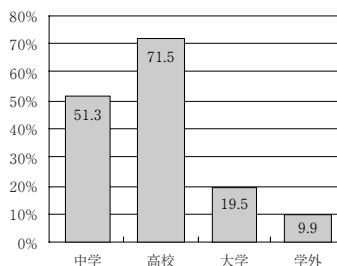


図1b 経験者のみによる換算



## 3.1.3 現在との比較

学生時代に辞書指導を受けた経験の有無と、教員になった現在の自身の授業における辞書の扱いとの関係を調べるために行ったクロス集計の結果が表1である。過去に辞書指導を受けたことがある教員296名\*のうち、その57.8%が現在授業で辞書を扱うと回答している。その一方で、辞書指導を受けたことがない教員68名\*の6割以上と、指導を受けたかどうか覚えがない教員101名の半数以上が、現在授業で辞書を扱っている。このことから、かつて辞書指導を受けた経験の有無と現在の授業での辞書の扱いとの間には特に関係は認められなかった ( $\chi^2=2.398$ , n. s.)。さらに教員の勤務校種別に分析した結果が表1aである。例えば表1によると、57.8%の教員が過去に辞書指導を受けて現在も授業で辞書を扱っているが、表1aでその内訳を見ると、高校教員は82.7%であるが、中学校教員は僅か31%に過ぎない。ここでも同様に、辞書指導に関してかつての経験と現在の使用状況との間に特筆すべき関係は認められなかった (中学校:  $\chi^2=0.293$ , n. s., 高校:  $\chi^2=3.612$ , n. s.)。

以上のことから、過去に辞書指導を受けたかどうかにかかわらず、高校ではよく辞書が扱われるが、中学校ではあまり扱われないという一定した傾向が認められたことから、授業で辞書を扱うかどうかは、過去の経験よりもむしろ現在の勤務校種のほうが大きく影響していると考えられる。

\* 3.1.1で示した辞書指導を受けた教員302名のうち6名と、受けなかった

教員78名のうち10名は、現在の辞書使用に関する質問に回答しなかった。

表1 かつての辞書指導経験×現在の辞書の扱い

現在授業で辞書を扱って	学生時代に辞書指導を		
	受けた (N=296)	受けなかった (N=68)	覚えていない (N=101)
いる (N=226)	<b>57.8%</b>	<b>63.2%</b>	<b>51.5%</b>
いない (N=199)	42.2%	36.8%	48.5%
合計 (N=465)	100.0%	100.0%	100.0%

表 1 a 勤務校種別

		学生時代に辞書指導を		
		受けた	受けなかった	覚えていない
中学 教員	現在辞書を扱って	(N=142)	(N=30)	(N=53)
	いる (N=67)	<b>31.0%</b>	<b>26.7%</b>	<b>28.3%</b>
	いない (N=158)	69.0%	73.3%	71.7%
高校 教員	現在辞書を扱って	(N=139)	(N=38)	(N=47)
	いる (N=186)	<b>82.7%</b>	<b>92.1%</b>	<b>76.6%</b>
	いない (N=38)	17.3%	7.9%	23.4%

### 3.2. 「具体的にどのような指導内容でしたか」(複数回答)

#### 3.2.1 全体集計結果

過去に辞書指導を受けた教員は具体的にどのような指導をされたのかを尋ねたところ、表 2 a のような結果が得られた。この質問事項には a. ~n. の 14 の回答選択肢が用意され、複数回答を可とした。表中の「全体」とは、学生時代を通して一度でもその項目に関して指導されたことがある教員の割合である。同一教員が複数の時代の複数の項目に回答するケースが含まれるため、カイ二乗検定は行わずに、回答度数分布に特徴的な傾向が表れている部分に注目した。なお選択肢「n. その他」には、どの項目も選択せずにその時代に指導を受けたことだけが記された回答や、「引くのが当たり前という概念の授業であった」「高校の時と同じ使い方では不十分と言いつけられた」などのやや抽象的な回答が含まれる。

まず全体では、「a. 意義の説明」と「e. 例文参照」の割合が他の項目に比べて高いのに対し、「h. 練習帳の利用」や「j. 解説頁の参照」はかなり低い。まず「h.」に関しては、現在でも未だ認知度がそれほど高くない辞書ワークブックは、教員の学生時代であればさらに認知度が低かったと思われることや、時代を遡るとワークブック自体がまだ存在しなかったためと考えられる。そして「j.」については、辞書に限らずどんな製品の仕様書もあまり読まれることが無いという一般的傾向や、使いながら自然に習得するであろうという考え方などが、実施率が低い主な原因と思われる。

表2a 学生時代に受けた具体的指導内容

	全体 N=302	中学時代 N=155	高校時代 N=216	大学時代 N=59	学外 N=30
a. 辞書使用の意義を説明された	<b>50.3%</b>	<b>38.1%</b>	<b>46.8%</b>	<b>35.6%</b>	16.7%
b. 使用する辞書について紹介をされた	16.2%	18.7%	10.6%	3.4%	0.0%
c. その時間の新出語句を調べた(語義の選定)	36.4%	34.8%	33.3%	13.6%	10.0%
d. 発音記号や強勢, 音節等を教えられた	28.8%	17.4%	21.8%	20.3%	<b>46.7%</b>
e. 用例・例文を参照した	<b>61.6%</b>	31.0%	<b>66.2%</b>	<b>54.2%</b>	<b>50.0%</b>
f. 辞書引き競争をした	17.5%	<b>23.9%</b>	7.4%	3.4%	10.0%
g. 複数の辞書を引き比べた	9.9%	3.2%	4.2%	<b>30.5%</b>	3.3%
h. 辞書引き練習帳(ワークブック)を使った	1.3%	1.3%	0.9%	0.0%	0.0%
i. 辞書中の記号の意味や約束事などを教えられた	14.9%	11.6%	10.6%	13.6%	16.7%
j. 巻頭にある使い方の説明のページを参照した	6.6%	5.2%	5.1%	3.4%	0.0%
k. 辞書使用のコツを教えられた*	15.2%	3.2%	15.3%	20.3%	16.7%
l. 具体的な指導は無く, ひたすら辞書を引かされた	7.6%	6.5%	5.1%	3.4%	3.3%
m. 実際には辞書を使う機会があまりなかった	3.6%	5.2%	0.9%	1.7%	0.0%
n. その他	1.3%	0.6%	1.4%	3.4%	0.0%

\*: 引くタイミングや辞書無しで類推する練習なども含む

### 3.2.2 各種校学生時代別集計結果

次に表2aに基づいて各校種の学生時代に特徴的な傾向が無いのか吟味してみる。まず中学生時代では「f. 辞書引き競争」の割合が他の時代に比べて高い一方で、「k. コツの教授」や「e. 例文参照」の割合は低い。英語初学者である中学生には発展的な使い方よりも、辞書引き競争で辞書に親しませたり、辞書を使うことの意義を理解させたりする等の基礎・基本に重点が置かれていたことが窺える。3.1.2節で最も多くの被験者が辞書指導を受けた時期であることが判明した高校生時代では、「a. 意義の説明」と「e. 例文参照」が最も高く、表2a中の「全体」の傾向をそのまま反映した結果となっている。そして大学生時代では他の時代に比べて「g. 複数辞書の参照」の割合が顕著に高く、辞書はある程度使いこなせるようになった(と判断された)大学生に対しての発展的な指導事例といえる。また「d. 発音記号等」の音声面の指導は、学校の授業でよりも学外でよく行われていたようである。



## 3.2.3 現在との比較

過去に受けた指導内容に対して、現在は授業で生徒にどのような辞書の使わせ方をしているのであろうか。現在の具体的な扱い方を尋ねた質問の回答を教員の勤務校種別にクロス集計した結果が表 2b である。全体的には例文参照と語義選定の割合が高い。続いて勤務校種別にみると、高校に比べて中学校では、辞書引き競争を実施したり ( $\chi^2=24.93$ ,  $p<.01$ ), 具体的な指導はせず生徒の好きなように使わせている ( $\chi^2=12.84$ ,  $p<.01$ ) 教員が多く、逆に全体傾向で多かった語義や例文を参照させる教員は少ない ( $\chi^2=15.93$ ,  $\chi^2=8.02$ , いずれも  $p<.01$ )。一方高校では、語義以外の周辺情報を参照させる教員が中学校よりも多い ( $\chi^2=22.86$ ,  $p<.01$ )。また、統計的に有意ではないが、発音記号等の音声面の指導や辞書を使わずに語義を類推させるなどの発展的な指導と、ワークブックを使った基礎的な指導との両方が高校ではよく行われていることもわかる。

表 2b 現在の授業での辞書の具体的使用方法

	全体 N=256	中学校教員 N=66	高校教員 N=190	$\chi^2$ 検定 df=1
辞書使用の意義を説明する	22.7%	22.7%	22.6%	n. s
その時間の新出語句を調べさせる(語義の選定)	<b>46.9%</b>	25.8%	<b>54.2%</b>	**
発音記号や強勢、音節等を教える	19.5%	12.1%	22.1%	n. s
用例・例文を参照させる	<b>60.2%</b>	45.5%	<b>65.3%</b>	**
分節を確認させる	2.0%	1.5%	2.1%	n. s
語法や周辺情報を参照させる	38.3%	13.6%	<b>46.8%</b>	**
辞書引き競争をする	15.6%	<b>34.8%</b>	8.9%	**
複数の辞書を引き比べさせる	2.0%	1.5%	2.1%	n. s
辞書をあえて使わず、類推させる	2.7%	0.0%	3.7%	n. s
辞書使用のコツを教える	18.8%	22.7%	17.4%	n. s
辞書中の記号の意味や約束事などを教える	6.3%	6.1%	6.3%	n. s
巻頭にある使い方の説明のページを参照させる	3.1%	1.5%	3.7%	n. s
具体的な指導より、とにかく辞書を引かせる	10.9%	12.1%	10.5%	n. s
辞書引き練習帳(ワークブック)を使う	3.1%	0.0%	4.2%	n. s
生徒の自由に任せる	14.1%	<b>27.3%</b>	9.5%	**
その他	5.9%	18.2%	1.6%	

\*\*&lt;.01

表2aと表2bを見比べて気づくことがいくつかある。例えば、学生時代に辞書を使う意義を説かれた教員は全体で50.3%いるが、現在それを実施している教員は22.7%に過ぎない。その一方で辞書を引くコツの教授については、中学時代で3.2%、高校時代で15.3%、そして大学時代で20.3%のように学年があがるほどよく行われたのに対し、現在では逆に中学校での実施率のほうが高い(22.7%)。「意義を説くより使って慣れろ」という考え方が先行しているのかもしれない。他に気づく点として、7割以上の教員に共通して該当する指導事項が無いことが挙げられる。最も多くの教員に該当する項目として、表2aでは高校生時代の用例参照が66.2%、表2bでは高校教員の用例参照が65.3%である。つまり、誰もが共通して経験したり、実施している指導事項が無く、教員個人によってかなりばらつきがある。このことは、ずっと以前から体系的な辞書指導が確立されないまま現在に至っていることの表れと言えそうである。

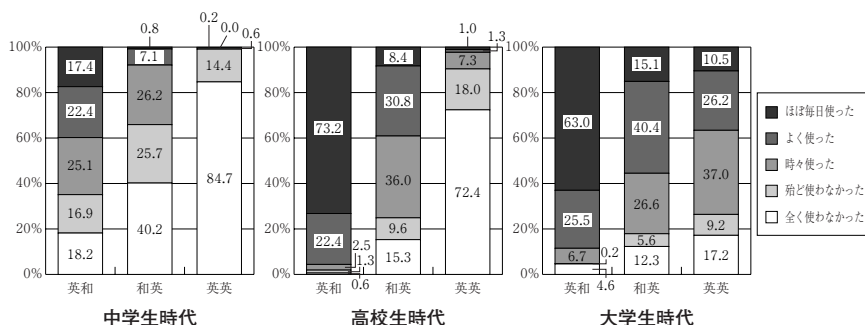
### 3.3. 「学生時代に授業外でどの種類の辞書をどのくらい使いましたか」(辞書種は複数回答可)

#### 3.3.1 全体および各種校学生時代別集計結果

この質問では、授業で辞書指導を受けたか否かに関係無く、学生時代に個人的にどの種類の辞書をどの程度使っていたかについて尋ねた。ゆえに、辞書指導を一度も受けたことがない教員もこの質問に回答している。その結果を表した図2によると、使用辞書は英和が最も多く、以下は和英、英英の順に続く。特に高校・大学時代における英和辞書の使用頻度の高さが顕著であり、和英辞書と英英辞書は大学時代に最もよく使われている。まず英和辞書の使われ方に着目してみると、中学生時にはほぼ毎日使った教員はわずか17.4%で、「よく使った」を合わせても39.8%であるのに対し、高校生時には73.2%、大学生時には63.0%がほぼ毎日のペースで使っており、「よく使った」まで合わせるとそれぞれ95.6%、88.5%に達する。次に英英辞書の使用頻度に注目すると、

「時々使った」まで含めると高校生時に既におよそ1割の教員が使用しており、大学生になると7割を超える。現在の一般的な学生の辞書使用状況を考えると、これはかなり高い利用率である。概して教員の学生時代には自分の担当教科が得意または好きであった場合が多いが、本調査の英語教員もその例に漏れず自ら積極的に辞書を活用していたと思われる。

図2 学生時代の各種辞書使用頻度（有効総数 478）



### 3.3.2 現在との比較

最後に、過去の個人的辞書使用と現在の授業での辞書使用との関係を調べた。表3は被験者の中学生時代について現在の勤務校種別に集計した結果である。中学生時の辞書使用頻度とは関係なく、高校教員の8割以上が現在授業で辞書を扱っているのに対し、中学校教員の場合はわずか3割程度である。中高どちらの教員の場合もカイ二乗検定で有意差は認められなかった ( $\chi^2=5.024$ , n. s. ;  $\chi^2=2.517$ , n. s.) ことから、中学生時代の自主的辞書使用頻度と現在の授業での辞書使用状況との間に特に関係は無く、辞書は中学校教員よりも高校教員がよく使うという3.1.3節の分析結果と同じ傾向がここでも認められた。

高校生時代と大学生時代についても同様の集計をし、現在辞書を使っている数値の部分だけを1つにまとめたのが表3aである。どの学生時代とのクロス集計においても、中・高教員ともに有意差は認められなかった。このことか

表3 過去の個人的辞書使用頻度×現在の授業での辞書使用（勤務校種別）

		現中学校英語教員					合計
		中学生時代の個人的辞書使用頻度					
現在辞書を		毎日	よく	時々	殆ど	全く	
使っている	N	8	18	18	10	6	60
	%	36.4%	36.0%	24.3%	21.7%	42.9%	29.1%
使っていない	N	14	32	56	36	8	146
	%	63.6%	64.0%	75.7%	78.3%	57.1%	70.9%
合計	N	22	50	74	46	14	206
	%	10.7%	24.3%	35.9%	22.3%	6.8%	100.0%

		現高校英語教員					合計
		中学生時代の個人的辞書使用頻度					
現在辞書を		毎日	よく	時々	殆ど	全く	
使っている	N	49	44	37	24	9	163
	%	89.1%	80.0%	80.4%	82.8%	75.0%	82.7%
使っていない	N	6	11	9	5	3	34
	%	10.9%	20.0%	19.6%	17.2%	25.0%	17.3%
合計	N	55	55	46	29	12	197
	%	27.9%	27.9%	23.4%	14.7%	6.1%	100.0%

表3a 各校種学生時代における個人的辞書使用頻度と現在の授業での辞書使用率の集計結果

		現中学校英語教員					合計
		各学生時代の個人的辞書使用頻度					
		毎日	よく	時々	殆ど	全く	
中学生時代		36.4%	36.0%	24.3%	21.7%	42.9%	29.1%
高校生時代		33.3%	21.2%	20.0%	0.0%	0.0%	29.2%
大学生時代		32.6%	28.2%	14.3%	0.0%	0.0%	29.9%

注：この表中のゴシック部は、表3のゴシック部に相当。

		現高校英語教員					合計
		各学生時代の個人的辞書使用頻度					
		毎日	よく	時々	殆ど	全く	
中学生時代		89.1%	80.0%	80.4%	82.8%	75.0%	82.7%
高校生時代		82.8%	85.4%	87.5%	50.0%	0.0%	83.1%
大学生時代		81.8%	87.2%	72.7%	0.0%	100.0%	82.6%

注：この表中のゴシック部は、表3のゴシック部に相当。

ら、学生時代の辞書使用頻度に拘らず、高校教員は現在授業でよく辞書を使い、中学校教員はそれほど使わない、という前述の中学生時代に認められたのと同じ傾向が、他のどの学生時代にも認められた。つまり、学生時代にどの程度個人的に辞書を使っているか、教員になった現在の授業における辞書の扱いへ及ぼす直接的な影響はほとんど無いという結果が得られた。

#### 4. まとめと考察

まず、ここまでの結果を簡潔にまとめると次のようになる。全被験者の62.4%が学生時代に辞書指導を受けた経験を有する結果が得られたが、実際には指導を受けていながら「覚えていない」と答えた教員も含めると7割近くに達する可能性もある(3.1.1)。指導を受けた時期は高校生の時が最も多かった(3.1.2)。学生時代に辞書指導を受けたか否かに拘らず、現在授業で辞書を扱う教員は扱わない教員より多く、その大半は高校教員が占める(3.1.3)。つまり、かつて辞書指導を受けた中学校教員でもその多くは普段の授業で辞書を扱わず、そして指導を受けなかった高校教員でもその多くは普段の授業で辞書を扱っているという事実から、授業における辞書の扱いに影響を及ぼす要因としては、過去の辞書指導体験よりも、むしろ現在の勤務校種のほうが大きい。

過去に受けた具体的な辞書指導内容で最も多かったのは、辞書を使う意義の説明と例文参照であった(3.2.1)。学生時代別でみると、中学時代には辞書引き競争、高校時代には辞書使用の意義の教授と例文参照、大学時代には複数辞書の参照、そして学外では発音記号の指導がそれぞれ最も多く実施されていた(3.2.2)。学生時代に受けた指導とは異なり、教員となった現在は辞書指導の意義を説くよりも、使い方のコツを教える傾向が強い反面、例文参照は今も昔も変わらず頻繁に指導されている(3.2.3)。

英語教員の多くは学生時代に自主的に辞書をよく使っていた。高校時代には73%、大学時代には63%の教員が英和辞書をほぼ毎日のペースで使っていた

ほか、英英辞書については高校時代に1割が、大学時代には7割もが使っていた(3.3.1)。過去の自主的使用頻度に関係なく、現在では辞書は中学校よりも高校の授業でよく扱われている(3.3.2)。この傾向はどの分析結果でも見られるため、他の要因の影響を受けない普遍的傾向と思われる。

以上の結果から、過去に受けた辞書指導や自主的辞書使用の経験は、現在の授業における辞書の扱い方に直接的には影響していないことと、かつて受けた指導内容と現在行っている指導内容とが必ずしも同じではないことが明らかになった。つまり、2.1.節で示した予測は外れる結果となった。かつて辞書指導を受けた教員であればそのノウハウを今の教育現場に活かすことができるはずであるにも拘らず、特に中学校では残念ながらそれが実現していないのが現状である。まず大切なのは学習者に辞書指導の機会を与えることである。井上・多良(2004)や寺嶋(2007)でも述べられているように、多くの英語教員は体系的な辞書指導の必要性・大切さを実感しているにも拘らず、時間的な制約などによりほとんど実施していない。さらに言うと、現職英語教員の多くは学生時代に辞書指導を受けることが出来て幸いであるが、今の生徒はそれを受ける機会が少ないということでもある。学生時代の勉強のみならず、卒業後に仕事上で英語が必要になったときなど生涯学習の観点からもいざ頼れるのが辞書である。そして英語に限らずどんな言語を学ぶときにも辞書は不可欠である。辞書を十分に使いこなすには、それなりの知識と技能が必要であり、それらを独学で習得することは極めて難しい。英語教員などの英語を必要とする職業を目指す生徒や英語が好きな生徒であれば、辞書指導が無くても自ら好んで辞書を使うこともあると思われる。しかし概して英語学習者の中には英語嫌いが少なくなく、適切な指導無くして彼らが自ら辞書を使おうとするとは考えにくい。

以上のような点を踏まえて、英語学習の早い段階から体系的な辞書指導を行うに越したことはないのは明白であろう。辞書指導を受けた現職英語教員であれば、貴重なその経験を活かして自分の授業で辞書指導を実施出来るはずである。またそうしていかなければ、将来辞書指導未経験の英語教員があふれ、方

法がわからないために彼らが辞書指導をせず、再び辞書が使えない生徒を生み出すという悪循環に陥る危険性もある。具体的指導法として、とにかく使わせて辞書に馴染ませる「習うより慣れろ」式も一つの方法ではあるが、なぜ辞書を使えなければならないのか、辞書を使うことにどんな意味があるのかを学習者に理解させた上で段階的に使い方を指導していくことも必要である。

最後に、今後の辞書指導の在り方について考えるにあたり、現職英語教員に期待することがいくつかある。その1つとして例えば、教員は電子辞書の指導法に精通することが望まれる（石川，2004；関山，2005 a）。というのは、教員の学生時代とは異なり、今の生徒の大半は印刷辞書ではなく電子辞書を所持している。従来の印刷辞書用の指導法だけでは対応しきれない部分があるのも事実である。しかし電子辞書を手にしたことがない教員も少なからず居るはずである。関山（2005 a）が指摘するように、電子辞書の特性を把握しないまま持て余して電子辞書を使いこなせていない学習者も多い。ジャンプや複数辞書検索などの特殊機能、収録情報の階層性、電子辞書と印刷辞書の長所と短所など、教員自身がこれらを熟知し、生徒に指導できる能力が求められる。現在辞書指導が行われない原因の1つに、英語教員が電子辞書指導に対応できないということがあるのかもしれない。これからの英語教員、特に電子辞書に馴染みがない教員は、例えば『電子辞書活用ハンドブック』（カシオ教育研究所）の利用や、各地で開かれている辞書指導ワークショップへの参加などを通して、電子辞書とその活用法を理解し、辞書指導法の幅を広げていってもらいたい。関山（2005 b）が提唱する印刷辞書と電子辞書とを併用した「ハイブリッド式辞書指導」を採り入れるのも一案であろう。近年は学習指導要領における学習すべき内容の削減に伴い、授業時数との兼ね合いの関係で、辞書指導の時間が削られる対象になりがちであった。しかし英語教育について長期的展望を見据えたときの辞書の大切さを鑑み、英語教員は今後たとえ少しずつでも辞書のための時間を作り、指導していくよう努めることが望まれる。

## 参 考 文 献

- 浅羽亮一 (1997). 「英語教育における英和辞典について—学習者の立場から」『明海大学外国語学部論集』9, 123-137.
- 石川慎一郎 (2004). 「手持ちの電子辞書でここまでできる」『英語教育』8月号, 29-31. 大修館.
- 井上祐子・多良静也 (2004). 「英和辞書指導に関する教員の意識調査と現状—高知県内中学高校英語教員を対象にして」『高知大学教育学部研究報告』64, 69-80.
- 勝呂謙 (1988). 「自主学習の実態と辞書指導のあり方—単語検索能力は実力を反映するか—」『沼津工業高等専門学校研究報告』22, 75-86.
- 関山健治 (2005 a). 「電子辞書の最前線—どう選び, 使い, 教えるか—」『英語教育』4月号, 50-51.
- 関山健治 (2005 b). 「辞書をどう教えるか—電子辞書時代の辞書指導の方向性」『ことばと人間』5, 21-31.
- 関山健治 (2005 a). 「電子辞書の利用者行動に関する実証研究—利用者は電子辞書を本当に使いこなしているのか?—」『外国語メディア教育学会 (LET) 中部支部研究紀要』16, 11-22.
- 寺嶋健史 (2007). 「中学校・高等学校の英語授業における辞書使用の実態調査—愛媛県の英語教員を対象にしたアンケート調査から—」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』4, 19-36.
- 萩野敏 (1995). 「辞書指導としての学習英和辞典検討レポート」『大塚フォーラム』13, 84-89.
- 畠山豪 (2001). 「辞書指導の必要性和重要性—大学生の学習英和辞典の利用に関する調査から」『盛岡大学英語英米文学会会報』12, 60-68.
- 畠山利一 (1996). 「英和辞典の使われ方—大学生へのアンケート調査より—」『国際研究論叢』10 (1/2), 79-92.
- 藤村榮雄 (2001). 「英語学習と辞書」『奈良産業大学紀要』17, 85-122.
- ベネッセ (2003). 「特集: 新入生の学力変化の実態とその対策」『VIEW 21』4, 2-11. ベネッセコーポレーション.
- ベネッセ教育研究所 (2002 a). 『第3回学習基本調査報告書 中学生版』ベネッセコーポレーション.
- ベネッセ教育研究所 (2002 b). 『第3回学習基本調査報告書 高校生版』ベネッセコーポレーション.
- 山岸勝榮 (1998). 『英語教育と辞書の思想と実践』こびあん書房.